広島工業大学紀要研究編
第59巻（2025）61-67
論　　文

大陸における外交と詩作

トマス・ワイアットの作品に見る場所の影響

楠木　佳子*

（令和6年11月1日受付）

Diplomacy and Poetry in Continental Europe: The Influence of Place in the Work of Thomas Wyatt

Yoshiko KUSUNOKI

（Received November 1, 2024）

Abstract

Thomas Wyatt, a prominent courtier and diplomat to Henry VIII of England, produced a significant body of poetry during his time in continental Europe. This paper focuses on these works, exploring how his personal experiences and humanistic values are intertwined within the cultural and social context of the 16th century. In the course of this discussion, I will first focus on Wyatt's descriptions of nature in his poems, pointing out that they go beyond the framework of imitation and reflect Wyatt's experiences and feelings in his diplomatic service. Moreover, Wyatt's conflicted feelings—nostalgia for England and a yearning for the intellectual and cultural richness of continental Europe—significantly shaped his creative output.

Key Words: Thomas Wyatt, Europe, poet, diplomacy, geography, humanism

はじめに

Thomas Wyatt（1503-1542）の作品の中で，晩年に近いその人生の後半に創作したとされる作品群には，ヨーロッパ大陸での異国体験を背景としたものが含まれる。宮廷詩人であるWyattが，イングランド王ヘンリー8世の外交官としてフランスやイタリア，スペインなどヨーロッパ諸国を幾度も訪れていたことが，その作品世界に多様な文化的，政治的要素をもたらした。16世紀のヨーロッパ大陸で花開いていた人文主義文化の影響を直接的・間接的に受けながら創作活動を行ったことは，Wyattの作品の多くが原典作品の翻訳や模倣といった側面をもつ点からも明らかである。

本稿ではSusan BrigdenによるWyattの詳細な伝記と作品解説 *Thomas Wyatt: The Heart's Forest*（2012）を足がかりに，大陸で創作されたと考えられる作品を中心にとりあげ，常に政治的不安定な立場におかれたWyattが，大陸にいることで人文主義文化に基づく安定した創作の場を得ていたことを検証する。

その手段として，まずWyattの作品に見られる自然描写に注目する。16世紀の外交活動が様々な不確定要素をともなっていた事を，当時の社会における地理的意識の変化を追いながら確認し，その上で，作品中の自然描写が模倣の枠を逸脱して現実味を帯び，一見常套的な自然のモチーフが個人の経験に深く結びついていることを指摘する。

続いて，異国での長期滞在が外交官に与える心理的な影響に着目し，史実をもとにWyattの当時の状況と照らし合わせながら作品を考察する。外交任務の失敗によるイン

* 広島工業大学環境学部建築デザイン学科

グランドへの郷愁と大陸ヨーロッパへの文化的憧憬の間にある Wyatt の意識の変容を追う。

16 世紀「地図革命」前夜のイングランド

16世紀初頭の外交官の大陸移動の実情を考察するにあたり，Wyatt が外交活動を行っていた当時の社会における地理的な認識について考えてみたい。印刷技術の発達，大航海時代，天文学の発展などが重なる16世紀は，地図の制作技術や地理的な認識，知識に大きな変化がおこった時代である。ルネサンス期の地図はそれまで，中世から実際に船乗りが作成して使用する海図など実務的，専門的なものに限られていた。内陸の地図は特定の地域を範囲とし，主要な建物に加えて木々や川などを絵画のように描いた手描きの絵地図が多く，作成者の経験に基づいた概略的なものであった。ヨーロッパでは，15世紀のイタリアを先駆けに，木版画地図，印刷地図の進歩に比例してドイツ，フランスなど各国で地理学・地図学が発展していく。[1]

イングランドにおける地図の普及について，P.D.A. Harvey は *Maps in Tudor England* の中で次のように解説する。

> The cartographic revolution in England began probably at the very start of the sixteenth century. It was not until the 1530s, however, that there was radical change in any one field of map-making. Rather there seems to have been a sudden spread of the idea of drawing maps—picture-maps and diagrams—for various purposes and in various contexts.（27）

16世紀は “cartographic revolution” と呼ばれる画期的な時代であった。1500年頃には地理的な知識の不足や技術的な制約により地図の利用はほぼなく，あっても限定的であった。 その後1530年代の地図製作の急進的な変化を経て，16世紀末にはごく日常的に広く利用されるようになる。[2]

当時のチューダー朝イングランド宮廷，特にヘンリー８世治世下の宮廷には，イタリアやフランスなど大陸からの洗練された人文主義の文化が流入していた。Peter Barber は “England I: Pageantry, Defense, and Government: Maps at Court to 1550” において，16世紀ヨーロッパにおける人文主義を代表する思想家，Erasmus や Castiglione がイングランド宮廷を訪問した例を挙げ，1520年代のイングランド宮廷における人文主義的な意識の変革を論じているが，そこでは地理学への関心の高まりも言及されている（28）。

また，Erasmus や Castiglione 同様，人文主義者 Thomas Elyot の思想書 *The Book Named the Governor*（1531）には，“The most commodious and necessary studies succeeding ordinately the lesson of poets.” と題した章において，King Alexander が「地図」の必要性について，軍事的価値を超えて広く一般に必須と捉えていたという記述がある。

> Wherefore it may not be of any wise man denied but that cosmography is to all noblemen, not only pleasant, but profitable also, and wonderful necessary.（36）

いずれの書も，ヨーロッパ諸国の文化人誰もが求めた知識の書であり，そこにある “cosmography”（地図）に関する記述は，16世紀当時の，それも1530年代前後という Wyatt が最も宮廷人として精力的に活動していた時期の地理的な意識の高まりを示すものである。

このように16世紀中頃，イングランドの地理的認識は爆発的に拡大したが，Wyatt が外交の任務についた1520年代から30年代は，いまだその革命前夜とも言える時期にあった。1530年代以降に急激に進展した地図制作技術や，縮尺地図の登場を考えると，Wyatt が利用できた地図は手書きのものが中心であり，実用的かつ信頼性の高い地図が手元にあった可能性は低い。

また，地理的情報に加えて，外交官のための指南本もほぼ存在せず，Wyatt は経験に基づいて外交業務を学ばなければならなかった。1526年の最初の外交経験が，同時に “apprenticeship”（見習い）の期間だった。[3] 物理的な移動の困難さ，不確かな地図と情報不足，浅い経験の中で，Wyatt はヨーロッパ各地を旅したのである。

このような背景を踏まえ，次の章からは旅と外交の実情を考えあわせながら，創作の場所がヨーロッパ大陸である Wyatt の作品を考察する。

模倣とオリジナルの自然描写

Wyatt は1526年のフランス宮廷への任務を皮切りに，1539年のスペインからの帰国まで，幾度も外交使節としてヨーロッパ大陸とイングランドを往復した。Wyatt の作品の中でも特にスペインやその他ヨーロッパ大陸の任務中に創作されたとされる作品，遠く離れた土地から母国を謳った作品には，異国の風景や旅の道中を思わせるような表現が見られる。

1530年代に Wyatt がイタリア詩の原典から翻訳したとされる次の詩の冒頭は，周囲のあらゆる自然が詩人の困難な状況を代弁するかの如く描かれる。

> Like to these unmeasurable mountains
> Is my painful life, the burden of ire:

For of great height be they and high is my desire,
And I of tears and they be full of fountains.
Under craggy rocks they have full barren plains;
Hard thoughts in me my woeful mind doth tire.
Small fruit and many leaves their tops do attire;
Small effect with great trust in me remains.
The boist'rous winds oft their high boughs do blast;
Hot sighs from me continually be shed.
Cattle in them and in me love is fed.
Immovable am I and they are full steadfast.
Of the restless birds they have the tune and note,
And I always plaints that pass thorough my throat.
(1-14)[4]

原典は1531年版 Jacopo Sannazaro のイタリアソネットとされる。冒頭の "unmeasurable mountains" が詩人の苦悩の人生そのものに喩えられている。Wyatt の場合，"unmeasurable" という比喩的な語に込められるのは，複雑な外交交渉において自らが背負う重圧であろう。また地理的，物理的に何も正確に測ることができない当時の不安定な「旅」そのものかもしれない。高い山，そこに流れる泉，切り立つ岩と不毛な荒野はそれぞれ，実現が困難にも思われる高い望み，流した涙，報われない労苦として比喩的にとらえられる。Kenneth Muir and Patricia Thomson による詳細な解説では，本作は原典に忠実な翻訳作品であるとされる（295）。Wyatt が加えた数少ない変更点の1つは5行目の形容詞 "craggy"，"barren" の追加である。"Under craggy rocks they have full barren plains" は原典において "They have high faces of rocks" となっている（Rebholz, 353）。Wyatt が模倣の際に加える修正（revision）とその韻律に与える影響について Brigden は次のように述べる。

...the revisions were not always towards metrical smoothness, for different patterns accorded with his mood, and through roughness he might achieve the intensity and compression which are poetry's essence. (13)

"craggy"，"barren" の形容が加わることはリズムの面で余分な音節を与え韻律に乱れを生じさせる。だがこれらの形容には，Wyatt 自身の物理的に困難の多い旅の道中の体験，また政治的に不毛な外交経験が二重に込められており，語の追加で生じたリズムの狂いは詩人の心理的動揺を強調するかのようだ。また，この5行目を境に，4行目までの比喩表現は比喩性を保ちつつも読者の意識の中で具体的な描写へとシフトし，Wyatt の旅の記録へと変換されるようである。言い換えられた風景描写が実際の地理的情報であることを，詩的な韻律のバランスが崩れることで読者は気づくのである。さらには原典から引き継がれた先達の言葉の数々もまた，Wyatt の移動の道程そのものを彷彿とさせる場面を構成する要素に変容する。修正の言葉がきっかけとなって，読者は眼前に聳える "these unmeasurable mountains" を文字通り，旅の道中で越えなければならない山々として Wyatt の視点から捉え直すのである。

では，Wyatt のオリジナルの作品における自然の描写はどのように読めるだろうか。1539年，Wyatt がスペインから帰国する際に詠んだとされる Wyatt オリジナルの詩がある。2年以上の長期にわたるスペイン滞在の末，ようやく帰国となった際に書かれた次の詩は異国と祖国の「川」に言及して次のように始まる。

Tagus, farewell, that westward with thy streams
Turns up the grains of gold already tried,
With spur and sail for I go seek the Thames,
Gainward the sun that shew'th her wealthy pride
And, to the town which Brutus sought by dreams,
Like bended moon doth lend her lusty side.
My king, my country, alone for whom I live,
Of mighty love the wings for this me give.（1-8）

詩人がテージョ川のあるスペインの土地を離れ，テムズ川のある祖国イングランドへ戻ることをうたう。テムズ川は豊かに繁栄し，国王と国が馳せ帰るための翼を与えてくれる。"With spur and sail" の表現を文字通り読むならば，拍車と帆を持ち，陸路と海路を経て，つまりドーバーを越えて移動するイメージが浮かぶ。最終行において詩人の心はすでに海峡を越えているかのようだ。 Wyatt 自身の創作ではあるが，文学作品における川の描写は多様であり，川の持つ普遍的なモチーフもまた様々である。川の流れは時の流れを象徴し，川はその土地で起こったことを記憶する歴史の証人となる。また，川は人々を遠く新しい場所へ，あるいは故郷へと導く。Andrew Hadfield は "Chorography, Map-Mindedness, Poetics of Place" において，Michael Drayton の "chorographical poetry"（地理詩），*Poly-Olbion*（1612）の中で川が Thomas Wyatt the Younger の乱を含む数々の反乱を目撃した，反乱の時代を伝える重要な要素として描かれていることを指摘する。そしてその土地の自然描写が何よりもその時代を伝えることができる要素であるとしている（489）。Wyatt が描くテージョ川は，Wyatt の外交生活の全てを目撃した自然

であり，またテムズ川は帰国する Wyatt を変わらずに迎えてくれる確かな自然として Wyatt の経験と結びついている。さらに古典的な川のモチーフを脱する試みをするならば，Wyatt の視線の先にあるテムズ川は，若き良き日の自分が国王の任命を受けフランスへと渡り外交を成功させた際に出発した場所，「あのテムズ川」なのである。

> At the new year of 1527 he［Wyatt］encountered Sir John Russell travelling down the Thames, and hearing that Russel was on his way to Rome, in embassy to Pope Clement VII, Wyatt offered his services....
>
> （Brigden, 103）

このように読んでいくと，Wyatt のテージョ川とテムズ川の描写は，個人の感情と歴史的な文脈が複雑に絡んだ多層的な意味を持つものとして捉え直される。

大陸からイングランドを望む

ここからは，当時のイングランドとその他ヨーロッパ諸国間の政治情勢と外交官 Wyatt が置かれていた状況により注目しつつ，作品の分析を進めたい。1536年，Wyatt は Anne Boleyn との関係を疑われて投獄され，処刑こそ免れたものの悲劇的な体験をしている。その翌年のヨーロッパ派遣は事実上の追放だったとも言われている。この時期の Wyatt の外交任務はスペインとフランスの対立を引き伸ばしイングランドに有利に事を運ぶことであったが，1538年にはその両国が協定を結び，Wyatt の外交努力の失敗は明らかとなっていた。[5] イングランドにとって状況が悪化するこの頃に，Wyatt は次の “In Spain” と自身で題した詩を書いている。創作年は1537から1539年頃とされる。遠く離れた恋人に語りかけるように母国を思いながら自らの苦境を詠んでいる。

> From east to west, from west to th'east, so doth his journey lie.
> The life so short, so frail, that mortal men live here,
> So great a weight, so heavy charge, the body that we bear
> That, when I think upon the distance and the space
> That doth so far divide me from my dear desired face,
> I know not how t'attain the wings that I require
> To lift my weight that it might fly to follow my desire.
>
> （20-26）

ヨーロッパでの外交活動中も宮廷が移動するところへ，“From east to west, from west to th'east”（20），西へ東へと旅は続いていた。外交の重責を担う身は重く，祖国へ帰るための翼をどう手にすればよいかわからないという苦悩の詩である。Brigden は帰国を待つ外交官の生活を次のように解説している。

> Life in embassy was spent waiting; not waiting which allowed some purposeful activity, but waiting of anguish and distraction.（327）

Wyatt の外交使節団の帰還時期，ひいては帰還そのものが，当時の地理的制約，目まぐるしく変わる国際情勢，ヘンリー８世の意思も絡み，極めて不確実な状況にあった。“The life so short, so frail, that mortal men live here”（21）には，虚しく経過する時間の中，すでに外交官として為す術がないままスペインに滞在し続ける絶望感が表出している。

同時期の1537年に創作年が特定されている詩が，Wyatt がスペインの Monzòn 滞在時に書いた次の詩である。他国との関係が不穏なバランスにある中で安らぐことのない心情をうたう。

> Of Carthage he, that worthy warrior,
> Could overcome but could not use his chance.
> And I likewise, of all my long endeavour,
> The sharp conquest though fortune did advance,
> Could not it use. The hold that is given over
> I unpossessed. So hangeth in balance
> Of war my peace, reward of all my pain.
> At Monzòn thus I restless rest in Spain.（1-8）

この詩の原典は Petrarch の作品であるが，冒頭の二行以外は大幅に変更されている。“hangeth in balance / Of war my peace”（6-7）という詩の後半では，外交官として和平を望みながら不安定な政情にあることを吐露し，最終行にかけては，任務に邁進してきた自分が今は Monzòn にただ居残っているという虚しさが “restless rest”（８）と表現されている。

Brigden が “restlessness” を “part of Wyatt's nature and the expression of his unease”（５）と述べるように，“restlessness” は Wyatt の他の作品にも見られる特徴的な表現だ。例えば最初に引用した “Like to these unmeasurable mountains” の13行目には “restless birds” の表現があるが，ここはイタリア詩の原典ではより “singing birds” に近い表現が用いられており，“restless” は Wyatt による修正である（Muir and Thomson, 297）。休むことなく飛び回る鳥の歌声が険しく高い山に響く。移

動を繰り返しながら言葉を使って国王に奉仕し続けたWyattの外交人生そのものであろう。だが，この“restless birds”はWyattの死後1557年に出版された*Tottel's Miscellany*において，編者Richard Tottelにより“singing birds”に再度修正された（Marquis, 69）。ともすると国王への批判的な訴えとも解釈されうる“restless”は，一般の読者に向けて普遍的な鳥のイメージに修正されたのである。だが，修正を要する文化的，社会的文脈は，むしろ本来の詩人の意図を明確に浮かび上がらせた。“restless”は当時のWyattが置かれた政治的苦境と心理的不安とを示すWyatt自身の言葉として再認識されるのである。[6]

Wyattが実際休む間もなく，また心休まることなく活動していた例としてしばしば取り上げられるのが，1538年にヨーロッパとイングランドを短期間で往復した外交任務である。スペインとフランス両国が協定を結ぼうとしていた頃，いまだスペインの宮廷で任務についていたWyattはカール5世の指示で「15日間」の期限でイングランドへ「派遣」されている。[7] 他国の王の命令による自国への束の間の帰還であった。

> In June 1538 Wyatt was back in England. ...Riding furiously home on a mission of desperate urgency, he knew that as soon as he arrived he must turn back to France.（Brigden, 385）

結局，この任務を経ても政情が改善することはなかった。ここであらためて思い浮かぶのは，WyattがMonzònで書いた詩の中の“hangeth in balance”（6）の表現だ。不安定な政治情勢を示唆すると解釈されることが多い表現だが，今均衡を保とうとしているのはWyattの心である。イングランドへの帰郷を切望しながら，皮肉にも大陸からの使者として，それも極短い時間だけイングランドの地を踏むことになったWyattの心は，祖国と異国の間でバランスを崩し始めている。

大陸か，イングランドか

1539年，Wyattはついにイングランドへの帰還を果たす。“Tagus, farewll”の詩は，この帰国の前夜に書かれたとされる。先述したように，2つの土地を象徴する川を題材に，祖国への望郷の詩として読まれる詩である。だが，ここではこの川の描写の根底に流れる詩人のもう一つ別の意識に目を向け，あらためて読んでみたい。

テージョ川とテムズ川の対比は，単なる地理的な対比にとどまらない。西へ（“westward”（1））向かうテージョ川に対し東へ（“Gainward”（4））向かうテムズ川という対比が描くのは，それぞれの川が象徴する国家間の対立以上に，詩人の心の内的対立である。砂金に輝くテージョ川と繁栄するテムズ川の両方の讃美は，2つの土地の間で揺れ動く詩人の複雑な心情を映し出す。逆の方角へ流れるテージョ川とテムズ川の流れの引力のもとで，Wyattのベクトルはどちらへ向いているだろうか。

1536年の投獄で一度ヘンリー8世の信頼を失った宮廷人が，追放同然に異国へ派遣され，その外交任務に失敗した。母国は，国王はどのように彼を迎えるだろう。一方で，大陸ヨーロッパでは，詩人Wyattの才能は確かに花開いていたと言えよう。スペイン滞在中，Wyattが人文主義文化の只中で恵まれた環境にあったことはBrigdenが挙げる知的交流の例からも明らかである。

> Wyatt...might easily have discussed vernacular poetry and prosody with the most avant-garde poets of Charles's court, might even have discussed with Tasso a new poetry inspired by classical models.（356）

Brigdenによれば，Wyattと使節団の宮廷人たちは，外交先のスペインへWyattの作品を編纂した手稿であるEgerton Manuscriptを持参していた。彼らは任務先で移動を繰り返しながら創作活動を続けていたという。使節団の友人たちはWyattの作品をマニュスクリプトに治めるために清書していた。詩作は使節団に共通の楽しみだったのである。

> “...[W]riting poetry was a shared enterprise to amuse and distract himself and his friends.”（357）

政治的役割を失った後も，Wyattの詩作は続いていた。長年の大陸滞在を通じて知的経験を深めていた宮廷詩人Wyattは，すでに大陸の文化圏に属する自らの知識人としての立場を強く自覚していたのではないだろうか。

このことを裏付ける一助として，再度イタリアソネットの模倣詩“Like to these unmeasurable mountains”を振り返ってみたい。12行目，“Immovable am I and they are full steadfast.”は，このような詩人の内面の葛藤を象徴的に表現している。Wyattは外交官の任務により，身動きのとれない状況に置かれていた。同時に，人文主義文化の中心地である大陸ヨーロッパに深く根差し始め，その知的刺激を求めていた。この二つの状況が，“Immovable”には凝縮されている。詩の冒頭と終盤に繰り返し現れる“unmeasurable”かつ“steadfast”な山々はソネット形式の十四行という固定された枠組みと相まって，詩人の不動性に更なる安定を与えている。すなわち，Wyattにとって，大陸ヨーロッパにおける詩作は，不安定な自らの立場に安

定性と創造的な希望を与える唯一無二の場所であったと言える。

おわりに

Wyatt の作品は，原典と思われる作品が複数指摘されることがある。同時期のイタリアやフランスの複数の詩人たちが類似のモチーフで作品を創作しており，原典がどの作品であるのか不明なものもある。“Like to these unmeasurable mountains” の詩は原典を Sannazaro とする説と，それ以外のイタリア詩人とする説がある。またフランス詩人の Clement Marot も同じモチーフで詩を書いており，Wyatt の詩が影響を与えたとも，その逆とも論じられている。[8] いずれにしても，出版文化前夜の Wyatt の時代に類似の作品が幾つも存在することは，手稿のやりとりを始めとする活発で密な文学的交流がなされていた証と言えるだろう。そして事実上の追放生活ともされたヨーロッパ滞在を含む，Wyatt の大陸ヨーロッパでの外交生活こそがその主な舞台であった。

本稿では，Thomas Wyatt のヨーロッパ滞在中の作品に焦点をあて，当時の地理的な移動の実情を確認しつつ，Wyatt が移動を繰り返しながら大陸で創作した詩を吟味してきた。16世紀当時の文化的背景や社会情勢と照らし合わせて読むならば，それらの作品には外交官としての Wyatt 自身の経験と人文主義的な価値観が複雑に絡み合って表出していることがわかる。また，母国イングランドへの郷愁と豊かな知的経験を可能とする大陸ヨーロッパへの憧憬という二つの感情が，Wyatt の詩作に少なからず影響を与えていることを確認した。Wyatt が人文主義の大きな流れの中心でおこなった創作活動は，外交官として確かなことが何も約束されない状況において，測ることのできない距離，時間，困難，苦悩を全て，人文主義的モチーフと枠組みの中で詠むという確かな作業として詩人の心の拠り所となっていたに違いない。

＊本稿は The 3rd IAFOR International Conference on Arts &Humanities in Hawaii（2023 年 1 月 6 日於 Hawaii Convention Center）で行った研究発表 “Poetry Writing of Thomas Wyatt in Europe– Considering the Influence of Location of Composition” に基づくものである。

注

1．16世紀の地図学，地図制作の発展等については，ボイス・ペンローズ『大航海時代』（ちくま文芸文庫，2020），488-542，他。

2．P.D.A. Harvey, *Maps in Tudor England*（1993），7. 1530年代から1580年代にかけての実際の地図の例が Harvey に多く収録されている。1540年代に縮尺地図が初めて導入されるが，1580年代の地図にも縮尺地図と絵地図が混在する。発展の過渡期であったことがわかる。31-35.

3．Susan Brigden, *Thomas Wyatt: The Heart's Forest*（2012），318. “A novice ambassador had few guides to prepare him for embassy.” その後ガイド本がでた例としては1550年代の例を挙げる。

4．Wyatt の作品の引用は全て，R.A. Rebholz ed., *Sir Thomas Wyatt: The Complete Poems*（Penguin, 1978）に依る。引用末に行数を記載する。

5．Rebholz, *Sir Thomas Wyatt: The Complete Poems*, 24-28.

6．Tottel's Miscellany 編集時における「修正」の持つ意味については，拙著「修正されるテクスト－『トテル詩選集』出版の文脈におけるトマス・ワイアット作品の再考」広島工業大学紀要研究編，第56巻（2022），7-13 参照。

7．Rebholz, *Sir Thomas Wyatt: The Complete Poems*, 26. Rebholz はこの条件を “if he returns within 25 days” と記録しているが，それでも “an impossibly short time” と説明する。

8．この詩の原典と模倣の関係の詳細については，Kenneth Muir and Patricia Thomson, eds., *Collected Poems of Sir Thomas Wyatt*（1969），295-96を参照。

文　献

Barber, Peter. “England I: Pageantry, Defense, and Government: Maps at Court to 1550”. *Monarchs, Ministers, and Maps*. Ed. David Buisseret. U of Chicago P, 1992.

Brigden, Susan. *Thomas Wyatt: The Heart's Forest*. Faber and Faber, 2012.

Elyot, Sir Thomas. *The Book Named The Governor*. Ed. S. E. Lehmberg. Dent, 1962.

Hadfield, Andrew. “Chorography, Map-Mindedness, Poetics of Place”. *A Companion to Renaissance Poetry*. Ed. Catherine Bates. Wiley Blackwell, 2018. 485-497.

Harvey, P.D.A. *Maps in Tudor England*. The British Library, 1993.

Marquis, Paul A., ed. *Richard Tottel's 'Songes and Sonettes': The Elizabethan Version*. ACMRS, 2007.

Muir, Kenneth, and Patricia Thomson, eds. *Collected Poems of Sir Thomas Wyatt*. Liverpool UP, 1969.

Rebholz, R. A., ed. *Sir Thomas Wyatt: The Complete*

Poems. Penguin, 1978.
Tyacke, S, ed. *English Map-Making 1500-1650*. The British Library, 1983.
楠木佳子「修正されるテクスト－『トテル詩選集』出版の文脈におけるトマス・ワイアット作品の再考」広島工業大学紀要研究編 , 第56巻 , 7-13（2022）
ペンローズ , ボイス .『大航海時代』. 荒尾克己訳 . ちくま学芸文庫 , 2020.
山本義隆『十六世紀文化革命 2』. みすず書房 , 2007.